

表(テーブルを)読む 木野 工

表と言っても実にさまざまな形式のものがあつて、数値(一般には数字と言つたほうがわかり易い)を一定の項目別に並べてあるものから、曲線・折線・点線・破線などを使つたグラフ、各項の比較を主とした棒グラフ、円を扇形に分けたグラフなどまで、正確には『テーブル』ではなくて図表でも、表と呼んでいることが多い。これは、複雑な内容のある事象を、ある点毎に捉えた数値をかりて表示し、主観的な(あるいは感情的な、非論理的な、とも言えるだろうが)解釈は一切これを見る人に委ねて、冷徹に物理的な、事実在即した数値だけを提示することで、ある事象の全容を表現する一つの形式、とでも言うべきものなのである。『ある点毎に捉えた数値』とは書いたが『数値』が時には数字で表現し得ず、色の種類や濃淡で表わされることもある。

表は無意味な数値の羅列、並置なのだが、一つの数字が全体に対して、どんな意味を持つているか、隣り合せ、一つおき等、いろいろの組合せ、比較対照の仕方によって、どんな意味を持つてくるか、つまり変化の中から全体をつかむために大変有効なものであり、極端な数値から『円滑な変化』——スムーズ・カーブ、とか、連続、とかいう専門用語で表現されるのだが——の中に特異な事象をつかんだりすることに有効である。全体をつかむために、しばしば『平均』という方法が使われるが、別に難かしく考えることはないのだ、例えば体操競技の採点などを想起して貰えばいい。異端(例外として扱う)の数値である最高・最低を切り捨てて平均値を採り、これを全体像とする。後者の例は、なんらかの方法で地表下の岩石を数値で表示できる調査して行つて地質図に書きこんで行くと、周

囲や近隣と調和しない数値を示すところが出てくる。円滑でない数値、連続していない数値を、別の条件を加味して総合的に調べてみると、ある変つた傾向、ある変つた事象を示す別の数値群を発見できる。それが『断層』である。土中、岩石層を露頭やボーリングで実際に調べて確認はするけれども、目に見えない地表下の岩石層の構成や断層などは、ほとんどが人工地震を観測したメーターの記録する無数の数値を表にしたものを読みとることで識別して行く。

私たちに、地質学や、物理的実験、材料力学実験など、自然科学に関するテーブルの読破能力など必要はないけれども、日常生活に重要な意味を持つたり、実生活に有効な表に対しては、もう少し『表を読む』力を養う必要があるのではないかと思う。特に、それを女性に望みたいのだ。女性は(一般にだが)どういうわけか、お金の勘定に関しては数字的に細かな計算にたけているのに、一つの事象を数値で表わしたものに全く弱い。本質的に弱いのではなくて、不馴れなのだろうが、その訓練を自ら避ける傾きがある。

ゼミの弱味をさらすようで悪いが、単的な例を、体験から申上げる。私のゼミでは、生

きた新聞学を、というほどの意気込みで（どうも、意気込みだけに終っているのは確かなようなので、内心じくじたるものがあるけれども、それには目をつぶるとして）ゼミ前日の新聞を手にとって、ニュースの比較から正確な情報を、自分の力で読みとることの訓練をやっている。単純な事実を伝えているだけのニュース記事が、いくつかの新聞、発行地・発行時刻・掲載面・発行社などの違いを検討材料としてじっくり読み較べているうちに、微妙なニュアンスの違いがあることが、読者に多様な解釈を生み出させ、流し読みでは、皆が皆、箇条書き的な同一情報しか受けとっていなかったのに、検討後では各自のニュース解釈に心理的な深みと色彩が付加されていることが多い。

多数の読者が集って検討するから、各自の差異が出て、ニュースに彩色効果が出る。それは、往々『新聞に嘘はない。しかし、書いてないことは沢山ある』という欠を補ってくれる。これが、一人で新聞を読むと、そうは行かないだろう。自分はこのニュースをこのように解しているけれども、他の人はどのよう解しているか、と疑いを持って自分の理解を検討してみることなど不可能に近い。機

械的に字面に支配されるのが普通である。それ故に、新聞が持っている基本的な機能や条件、機械的制約などが理解されていないと困るし、その環境も重要な意味を常に持っている。

そういうものの一つを補足する資料として私は新聞週間に際して発行されるいくつかの数字的資料をコピーして学生に渡してみた。ところが、学生はほとんど特異な関心を示さず、翌週は検討の機会を失ったので、翌々週にそれについての検討をしようと思ったら、ゼミに携行して来た学生はほんの少数だった。十枚ほどのテーブルの一つを抄記すると次のようなものである。

	① 日刊紙の発行部数			
	配布部数	1部当り人口	1世帯当り人口	1部当り人口
合計	40,513千部	2.74人	1.22部	3.96人
東京	6,153	1.84	1.45	3.34
北海道	1,762	3.03	1.05	2.74
青森	363	4.14	0.91	
鹿児島	410	4.25	0.73	
	② 普及率の変化			
	普及率	1世帯当り人口	1部当り人口	1部当り人口
1955年	22,688千部	1.24部	3.96人	
1965	29,776	1.21	3.34	
1975	40,513	1.22	2.74	

一見、なんの意味もない。しかし、じっと見てみると、東京と他府県では実に変な差のあることに気付く。東京の人口は北海道の二倍（それもこれだけの数字から算出できる）だが新聞は三・五倍も出ている。また、一世帯当りの家族人数は東京が約二・五人、他はそれぞれ三・二、三・八、三・一で相当の開きがある上に、東京では大会社・官庁などの一括購読が他府県に比較して問題にならぬ比率を持っていることを考えると、東京の新聞が地方の新聞とは自ら違った紙面製作を求められることが機械的に理解できる。東京では外に出ている人が新聞を読み、地方では家にいる人が読む、という概念も生れて来る。これは数値の一つの意味に過ぎない。表②からは、この二十一年間に日本の新聞は倍近くにふえている（頁数では三倍以上）のに、一世帯当り部数は微小な変化しかなく、一部当り人口は三〇％も減っている。つまり人口増加率よりは世帯分離率が非常に高いということで、当然これに新聞製作は環境的要求を意識している。こんなことを考えながら数字をやりくりしてみると、色々面白い実益がある。